

くまさんだより

日本基督教団 豊橋東田教会

〒440-0055 愛知県豊橋市前畑町 112 ☎0532-54-3435

公式サイト <https://azumada.org/> 中島 善子牧師

2026年

3月号

3月8日発行

イラストは全て池谷陽子さんご提供

3月1日 主日礼拝

「十字架につけろ」中島 善子牧師
マルコによる福音書 15章1～15節



夜が明けると祭司長たちは長老、律法学者など、最高法院全体で相談した後に、イエス様をローマ総督ピラトに渡した。最高法院は、イエス様が自分を「神の子、メシア、キリスト」と認めたことを神への侮辱として死刑決議を下した。だがローマ当局はユダヤ教の神への侮辱に関心が無い。そのため、イエス様を死刑にするには、ローマ当局にとって「イエス様が危険人物だ」と訴えねばならない。

2節「お前がユダヤ人の王なのか」と総督ピラトがイエス様に尋ねたことから、ローマへの謀反を企て、ユダヤの王となろうとする政治犯として、最高法院から訴えられたと予想されるが「それはあなたが言っていることです」とイエス様は答えた。

イエス様はユダヤを治める政治的な王ではない。確かにイエス様は十字架の死と復活を通し、全地を治める王としての権能を神から授かる。でもそれは「罪と死を足下に従え、神の右の座ですべての者を審く王としての権能」であり、ユダヤ人の王とか、この世の王となるために、イエス様は十字架の道を行くのではない。

3節「そこで祭司長たちが色々イエスを訴えた」。ピラトの尋問に苛立つ祭司長たちが、イエス様の罪を並べるが、しかしイエス様は何も応答しない。そこでピラトが再び問うた。「『何も答えないのか。彼らがあのように、お前を訴えているのに』。しかしイエスが、もはや何もお答えにならなかったので、ピラトは不思議に思った」(4～5節)。

「不思議に思った」は「驚く」が元意。イエス様が今、浴びているのは、ただの罵詈雑言ではなくて、死刑判決を引き出すための訴え。反論しなければ死刑になる。だが彼らの訴えを全身に浴びながら、全く抵抗しないイエス様の姿は、ピラトには不思議と言うよりも「脅威に近い驚き」として映ったのではないか。

ピラトが促しても、もはやイエス様は何も語らない。それはナザレから始まり、地上においてイエス様が語るべき言葉は、あと1つを残して、すべて語り尽くしたからだ。残されている「十字架のメッセージ」。ご自分のすべてを賭けて「十字架」という、最後のメッセージを語るために、イエス様は一切の弁明を捨てて、口を閉ざす。

6節「ところで、祭の度毎に、ピラトは人々が願い出る囚人を1人釈放していた」。

過越祭にこうした恩赦の習慣があったと、聖書は告げるが、ローマ総督としての任務を無事に務めるため、こうした懐柔策をとっていたのかも知れない。

というのも、ローマ帝国の支配に抵抗する暴動がしばしば起きていたからだ。余り暴動が激しくなると、監督不行き届きと言うことで、ピラトは失脚してしまう。

暴動を起こし、人殺しをした囚人の中にバラバと言う男がいた。ここには詳細が記されていないが、ルカ23:28は「都に起こった暴動と殺人のかどで、投獄されていた」と、バラバについて記す。恐らく、反ローマ運動に参加していた政治犯の1人だったのであろう。

そこへ人々が例年通り、囚人の釈放を求めて、ピラトの所へやってきた。するとピラトはこの習慣を、イエス様に適用することを思いついた。

9節「そこでピラトは、『あのユダヤ人の王を、釈放して欲しいのか』と言った。祭司長たちがイエスを引き渡したのは、妬みのためだと分かっていたからである」。

ピラトは政治的な直感からだろうか、イエス様が無罪だと悟った。それだけではなく、祭司長たちがイエス様を妬み、裁判を起こしたと悟った。そこで、ピラトは釈放すべき者として、イエス様の名前を挙げていた。だが祭司長たちは群集を扇動しながら、尚も強引にバラバの釈放を求めさせた。

12節。「そこでピラトは改めて『それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者はどうして欲しいのか』と言った。すると群衆は叫んだ。『十字架につける』。ピラトは言った。『一体、どんな悪事を働いたというのか』。群衆は、ますます激しく『十字架につける』と叫びだした」。

バッハのマタイ受難曲で、ピラトが「バラバとイエスのどちらを釈放したいのか」と尋ねると、胸を突き刺すように「バラバ！！」と強烈なコーラスが入る。続いてピラトが「イエスはどうするのか」と尋ねると「十字架につける！ 十字架につける！」と畳みかけるコーラスが続く。ここはマタイ受難曲でも特に衝撃的な場面。群衆の残酷さ、否、人間の残酷さ、否、私達自身の残酷さに打ちのめされてしまう。

祭司長らに扇動された群衆は、バラバに釈放を叫んで、イエス様には「十字架につける」と叫んだ。イエス様の無罪を確信するピラトが、どんなに執り成しても、群衆は全くお構いなしに、ますます激しく「十字架につける」と叫び続けていく。

十字架につけられて死ぬことは、神に呪われて死ぬことだ(申命記21:23)。

けれども今、「十字架につける」と、叫び続ける群衆は1週間前には「ホサナ、ホサナ」と熱狂的にイエス様を迎えた同じ群衆。「ホサナ」は「今すぐ救ってください」という意味。群衆は熱くイエス様に救いを求めていたはずなのに、しかし今、彼らはあっけらかんとイエス様の死刑を求める。

そして15節「ピラトが群衆を満足させようと思ってバラバを釈放した」。群衆の満足は根拠なく、常に揺れ動く。彼等だけじゃない。私達も含めすべての人間が「何を求め、何に満足すべきか」分からず、右に左に揺れ動く群衆の1人。自分の命、自分の一生なのに、そのために「本当に求めるべきもの、本当に満足すべきものを、私達も世間の成り行きに任せて決めようとする、愚かで頼りない「あの群衆」の1人ではないのか。

「十字架につける」の叫びに煽られ、イエス様が無罪だと知りつつ、ピラトはイエス様の釈放ではなく、群衆のご機嫌取りを選んだ。群衆が騒ぎ出せば、巡礼者で混雑する過越祭の今、收拾が困難になる。

ピラトは群衆が暴徒化するのを恐れた。だから群衆が求めるまま、囚人バラバを釈放して、無実のイエス様に死刑判決を下した。

過越祭に罪人が赦され、罪のない神の独り子が罪に定められた。過越祭で毎年、子羊が屠られる。だがこの日、屠られるのはただの子羊ではなく、全き神の子羊だ。全き神の独り子が、十字架上で屠られる。この祭りで釈放される囚人は1人だけ。

けれども神の独り子が十字架上で屠られる時、すべての人々が、罪と死の牢獄から釈放される。

最初の人アダムが罪に堕ちて以来、例外なく、罪と死の牢獄に封印されて来たすべての人々が救い出される。

人は皆、求めるものが目移りするし、好き勝手に自己満足を求める救い難い人間。故にイエス様は「誰か」ではなくて、「一人残さず」人間を救わねばならない。

イエス様に救われた人間には、私達はもとより、イエス様を憎むユダヤ教指導者、イエス様に死刑判決を下したピラト、イエス様に「十字架につける」と叫んだ人々、そんな連中さえいる。

イエス様を憎み、裏切って「十字架につける」と叫ぶ悪党、すべてのバラバたち。なのにイエス様はご自分の命と引換えに、彼らを救い出す。そしてすべてのバラバを、すべての人間を、神との親しい交わりの中に送り届けてくださる。神との交わりこそ、人間が本当に求めるべきものだから。ここにこそ、本当の満足があるからだ。

私達人間にとって最も必要で、求めるべきものは「神との交わり」だということ、イエス様は「真の神であり、真の人」だからこそ、知っておられる。人となられた神だからこそ、人間に最も必要で、本物の満足である「神との交わり」を、私達に与えるため、神の御子であるイエス様にだけ赦される「アバ父よ」と、神に呼びかける権利も、「神の子供」と呼ばれる恵みも、イエス様は私達に与えて、惜しまない。

イエス様の死刑判決は、私達の無罪判決となり、更に神との交わりへの招待状となった。

15節は、イエス様が鞭打たれたことを記す。昔、見た「パッション」という映画で、鞭打ちのシーンが強烈だった。動物の骨や金属が埋め込まれている鞭で打たれると肉が裂ける。イエス様の傷と言うと手足のクギの傷と槍で突き刺された脇腹の跡を、私達は思い浮かべるが、イエス様は十字架につけられる前から、鞭で打たれて、全身の肉が裂けて、すでに傷だらけ、血まみれだった。

その鞭打たれた体が、更に十字架につけられると言う、イエス様の無残な姿は、悲惨すぎて、救い主には見えない。だがこの姿こそ、私達が受けるべき死刑判決を、代わって受けられた神の独り子の姿。この姿があるから、私達のすべてが赦されている。イエス様の血まみれの姿があるから、私達は神を「アバ父よ」と呼ばれる神との交わり、礼拝の交わり、聖餐の交わりに、今こうして招かれている。それは神が私達に「十字架につける」とは告げなかった確かな証し。イエス様が、私達に代わり死刑判決を受けてくださったという、何より確かな証しだ。

聖書の言葉はすべて以下から引用しています。

聖書 新共同訳：

◎共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

◎日本聖書協会

Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988